



仁勢叅官名所圖會

附錄

一下





不釋六車



一がま痛かろがみ御里より耐九母ともいふ永忍和氣の道場は日  
 蓮上人の彩像を祀りて三つの願を授けとつよめ我必出家せん二つよめ父  
 母の壽長くして我孝順を竭せん三つよめ法華の三大部摩訶訶を闍ん  
 慈安元年は歳二十六素懐を遂て剃髮と法名は日政字は元政初名  
 赤堂妙不可思議なりも稱と洛水妙光寺の大僧都日豊と師と  
 一法華の真旨を受く明暦元年の秋源安法塔寺の持齋と一字と  
 創して居弘仁の瑞光寺と号とち法衣を脱と長門持律の勅かこ  
 ころの法心蕃をうまふ双親を其の行系唐を説く後座蒲添す  
 本より内外の学を熟し和漢史譜を通し凡推のる代得る考意を存く  
 座師父母の傍と離れ旅終皆父母の後の吟哦とも後生涯附會の  
 説を語りて人と愚昧の言活る守ると嘗て著と不の書藉世は終り  
 萬治元年の冬歳八十七歳にして卒と寛文五年の冬母を又八十七歳  
 て天寿を終る孝心のより哀戚推て尋るべし先妣二十七日の冥福と修  
 ての後儀は病は所し遂は佳後の語は得ると曼陀羅を畫しと附  
 惠明と号し寛文八年戊申二月十八日歳は十六和号二首綴り心恙は終  
 を概して遷玄の首はまうせし稱心唐の例は蘇教と云

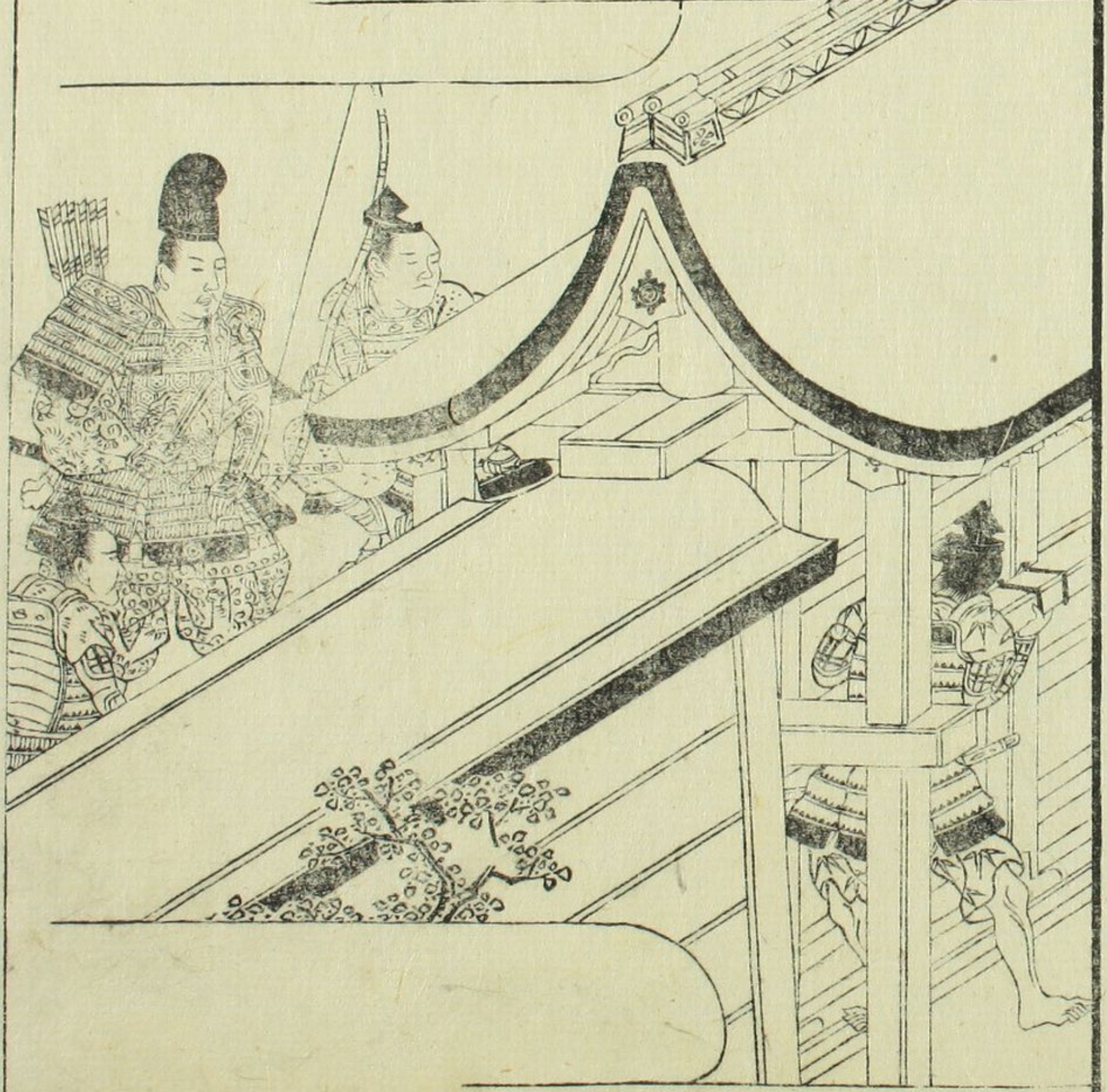
○北村季吟 小村の彦人拾徳軒或は呂唐と号と國學を貞徳と受和款



落武者忠度  
 遠馬 敵五条  
 俊成 御之門  
 狐川より馬と入  
 依たりし秀秋の  
 巻物と俊成御沙  
 一巻と討死乃  
 後千載集  
 さよ波や志賀の  
 むらさき  
 のそとあまれ  
 ぶし勅勅のあはれ  
 こころいふは  
 さけり平家物語  
 けきて人のよき  
 不之物より平家  
 抱渡り忠度の  
 あり



忠度の歌  
 いかせんよ本が糸  
 つむせりの  
 忠人の  
 千載集の二歌  
 忠人の糸をみる  
 糸にまじりて  
 忠人の糸  
 一肩にあはれ













黒主の大神宮より  
 連綿して長等山の地を  
 占めし神としておん光りまはさる  
 古時花洛の人此廟に祀る  
 一多あり一雨人の後まはる  
 流るるもを旧方々風流  
 一学の境なり貴を此  
 祠の其ををるは



黒主の大神宮  
 貫之祠





人あかりたりを本の下るもいふに成りたるが極多し今もよく石愛  
此の思より東の湖あり三井寺大津西白川洛中西山と眺望の絶勝あり  
拾遺集

極多し今もよく石愛  
此の思より東の湖あり三井寺大津西白川洛中西山と眺望の絶勝あり  
拾遺集  
志加美寺の舊址 志加美村の西方より西山のふもとに在りて其の地は  
拾遺集  
志加美寺の舊址 志加美村の西方より西山のふもとに在りて其の地は  
拾遺集

志加美寺の舊址 志加美村の西方より西山のふもとに在りて其の地は  
拾遺集  
志加美寺の舊址 志加美村の西方より西山のふもとに在りて其の地は  
拾遺集

穴六 此地都の流し後、後醍醐天皇の御代に在りて其の地は  
穴六 此地都の流し後、後醍醐天皇の御代に在りて其の地は  
穴六 此地都の流し後、後醍醐天皇の御代に在りて其の地は

穴六 此地都の流し後、後醍醐天皇の御代に在りて其の地は  
穴六 此地都の流し後、後醍醐天皇の御代に在りて其の地は  
穴六 此地都の流し後、後醍醐天皇の御代に在りて其の地は

所名

所名 所名

御津所あり此不要宮の地は御とて慈照寺の大嶽御軍地所のとみ新  
堀原と其御津遠例ありとて御とて御入城とて在りて寺を建ててこの穴六  
新坊と御興を考へられし御津遠例ありて天文十九年又月日終は此寺  
に豊せらる依之東山慈照寺に納奉り万松院と申すなりされは新坊  
をも万松院と云とぞ

真葛原 穴六の 系系とれも同名は道も慈照のあり此殿山の極多し  
我意の松をまゝとれ深きものも真葛原と申すなり

上坂中 西坂中 下坂中 両村とも人あまし其間並本松二町あり明智  
これを極るとりり神幸の乃之

元真如堂 上坂中の南あり寺あり其の寺は不ありなりなりなりなり  
十王堂 盛安寺を建てて其の寺は不ありなりなりなりなりなりなり

明智寺 盛安寺とて寺別の縁起十五卷に記し一は挑山の 明智光秀波を鼓  
大権現御廟 管造を引とて寺別の縁起十五卷に記し一は挑山の 明智光秀波を鼓

所名 所名

▲

▲

▲

▲

▲

▲

▲

▲

▲

▲

▲

▲

盛安寺

俗明智寺



附ノ四十五

所名

▲滋賀院シカノ 東叡山寛永寺の御里坊にて是俗名日光輪王寺宮の別院なり

▲開基開基 教法親王後水尾院の皇子之委くわい 門もん 既すで 傳つた へんへん 略りやく 之

▲慈眼大師廟 慈眼大師名天海南光坊と稱し俗姓中原氏外記願忠の見て

叡山中真閑山之石佛あり其内千持并座あり ○三佛堂

▲拂宮ハルミヤ 西坂中の山王祭の日大津に宮より大拂と稱し此宮は飯

宮らせ初列の人教宮に也

▲日吉山王社ヒコヤマ 村あり 舊傳云天智天皇の御宇に御徳應ありて桓武の延暦七

年諸社建立より後三条院延之二年始て終幸日延之に奉始て非

の宮幣燈をまつれり毎年二月祭礼中の雨の日空より降る雲を

宮七社社十に燈之受受三度ありて後長山門破郊の村社一社も

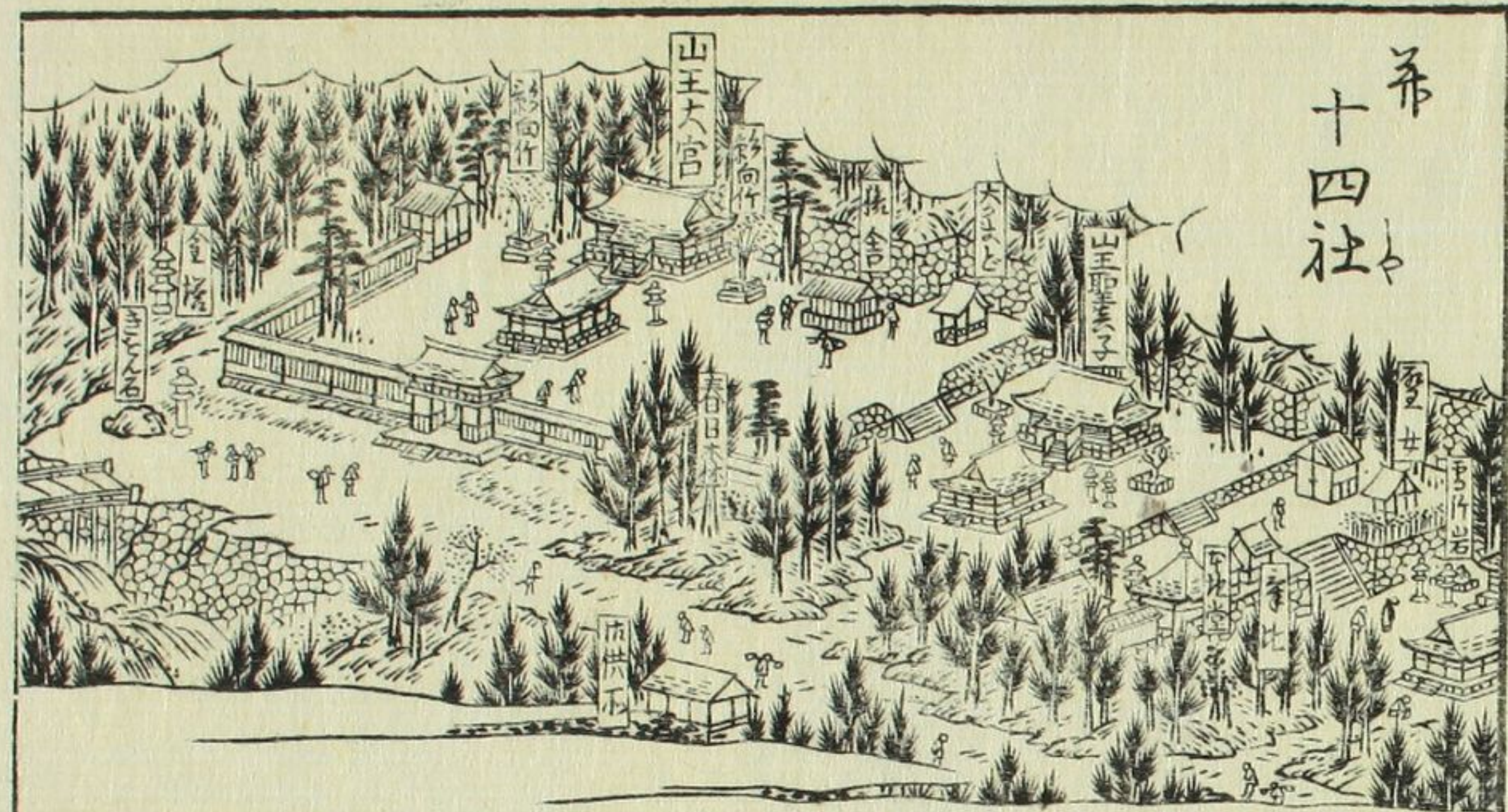
焼きて天正七年元のおく建之あり又神輿を振て玉子又歌詠とあり

坂河院長治二年大内重長侍受門は振るる始りして其後意安永の

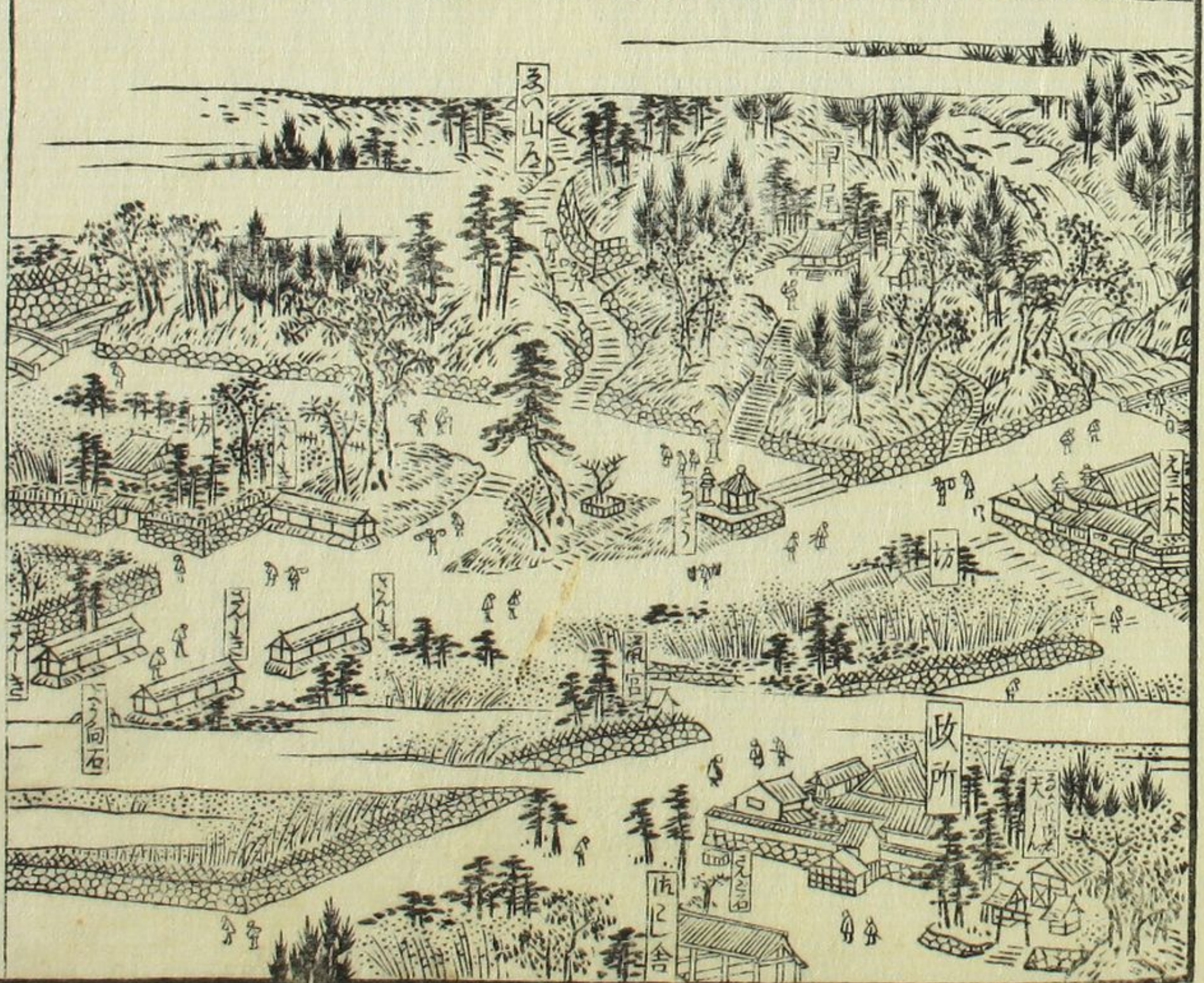
正に九十度より守り我いよ押ひし報害多し今又押ひし神輿の渡津の疾

威もくさつはひやせまは俗言も其送風あり

○旧記曰高木にて勤るるりの山之三又三緋緋とありりの王之是より

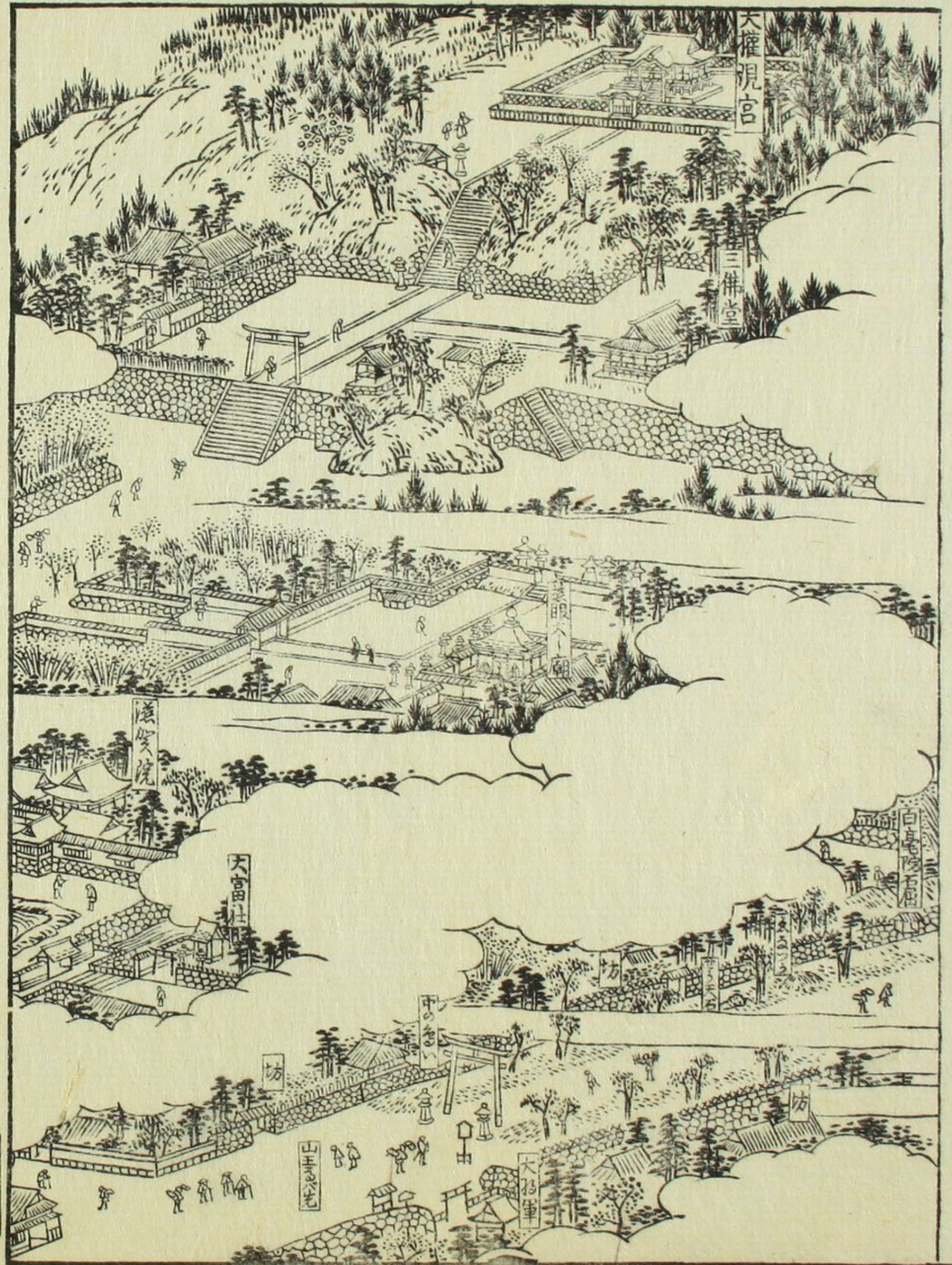
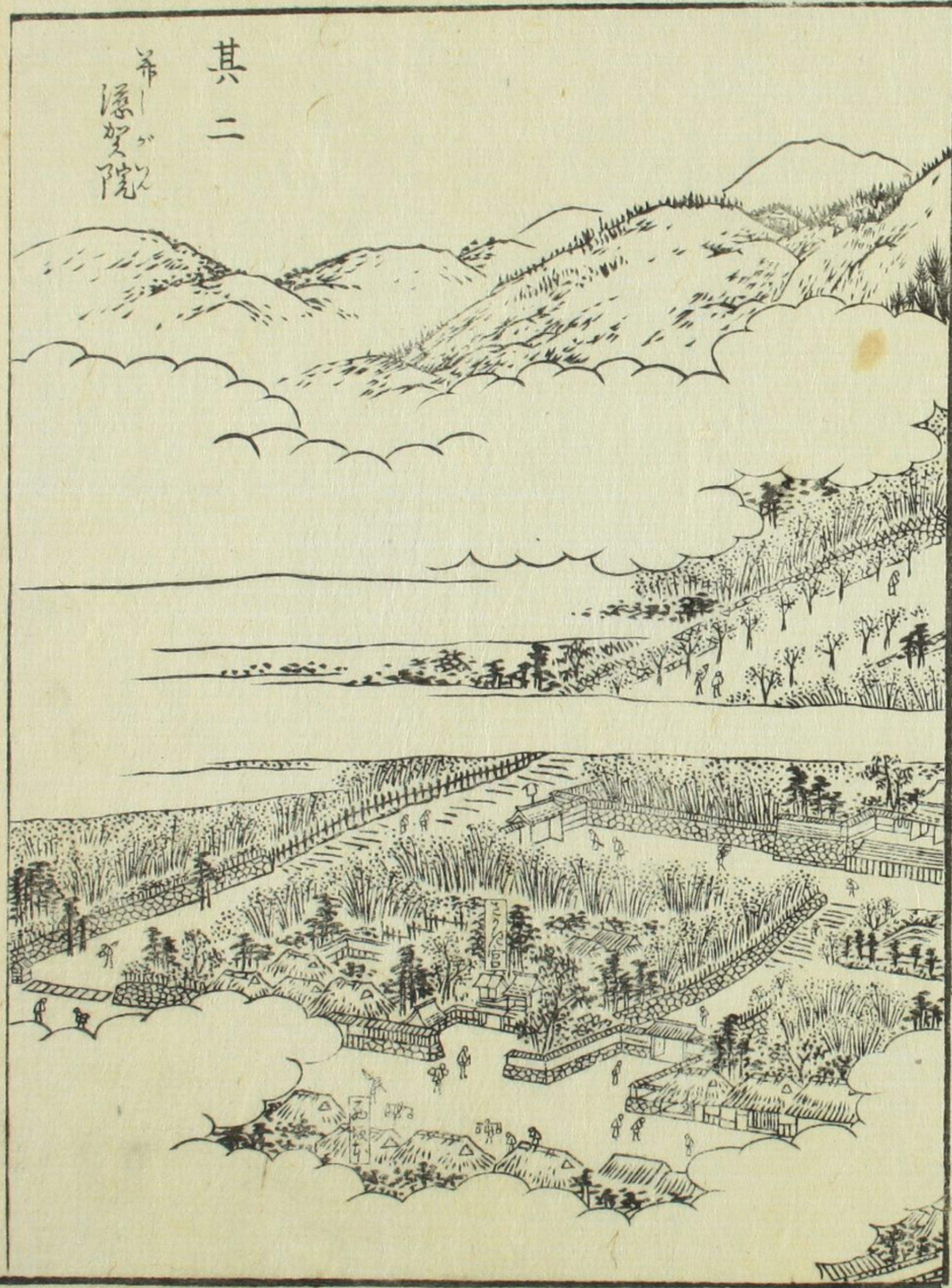


新  
十四社



えり  
山七社

其二  
源賀院





○客人宮 唐女形 垂跡淨持冊尊 本地十一面觀音 一説曰向山

妙理権現 桓武天皇即位延暦元年八王子の権藤又天降と。旧記云

文德帝天安二年六月十八日迁宮 聖人の云二年八月七社故撰 此宮のりうど。神輿の級牡丹輪捧

○雪竹の岩 宮の傍 十禅師 善僧形 童子形 垂跡續く持尊 本地地藏菩薩

○旧記云十者天七地三の教之師の國之禪のゆづる十者天子國と漢

るの義人 桓武天皇延暦二年正月十六日親向 三月廿四日廿五日親親辨講あり 神輿の級と兼なり

乙上七社

大宮 古の跡乃ち年以らるるたのみあひをよとる者けり 後未極

二宮 やとらるる新ど権藤より墨のきりて光りてのいふ 慈因

聖善子 居りてる光りて魚とありて西の雲井秋の夜乃月 僧都 良仙

宮神 今いふ光りてをうけりやとるにの白根や書れり 後未極

十禅師 本のかれ後後後照りて光りてをうきりてのいふ乃月 後未極

撰属十四社

○下八王子 垂跡天冲中尊 本地虚空院 本地石取と云石あり 乞津延

の地之。尚社と神馬あり 王子宮 十禅師拜殿の傍に在 垂跡建御名方神 本地文珠。旧記云

信乃後訪那より後産 早尾 垂跡素戔嗚尊 一説後田彦 本地石勒。旧記曰馬場原上

後産諸人加後深重の神なる故に坂口よこれを知る。傍に女天の社あり

○大紗司 垂跡高皇自産靈尊 本地毘沙門天 聖女 本地如之輪觀音。延喜年中造立聖善子乃

右の方より俗に聖善子の母なりと云 新婦事 瀧津姫をまつ 本地若洋天女。旧記曰天照神素戔嗚鳥の神を

盟ひて生石の三女の一也 山東 本地摩利支天 垂跡末洋

○牛尊 八王子の社あり 本地大威徳。傳曰牽牛星故なる

或云牛牽星子 牛牽星の火寒の日赫来理の口門に此像をまつて夜をまつらんと云

云事根源より云あり。傍に百舌鳥と云りのをまつ其友をまつと云

○小禅師 垂跡後出く出見尊 本地弥勒龍樹



頼毫成胤

三井寺實相房頼毫阿闍梨  
 白河院淨位の御后後の  
 皇子御誕生の御申勅書  
 をよまると云ふ倫云よりて  
 戒壇堂とて寺門年來  
 の御屋とて遠んとて奏し  
 たるに此の坊くはねえ  
 りきと勅許なりと云ひ  
 頼毫去りて再び皇子  
 をお産し終に持佛堂  
 于死して久しかり皇子の  
 永曆元年清年辰歳に  
 隠れさせ給ひたり此後  
 瀨山良真と終せり  
 再び皇子御誕生  
 ありしに又頼毫の  
 死矣然を

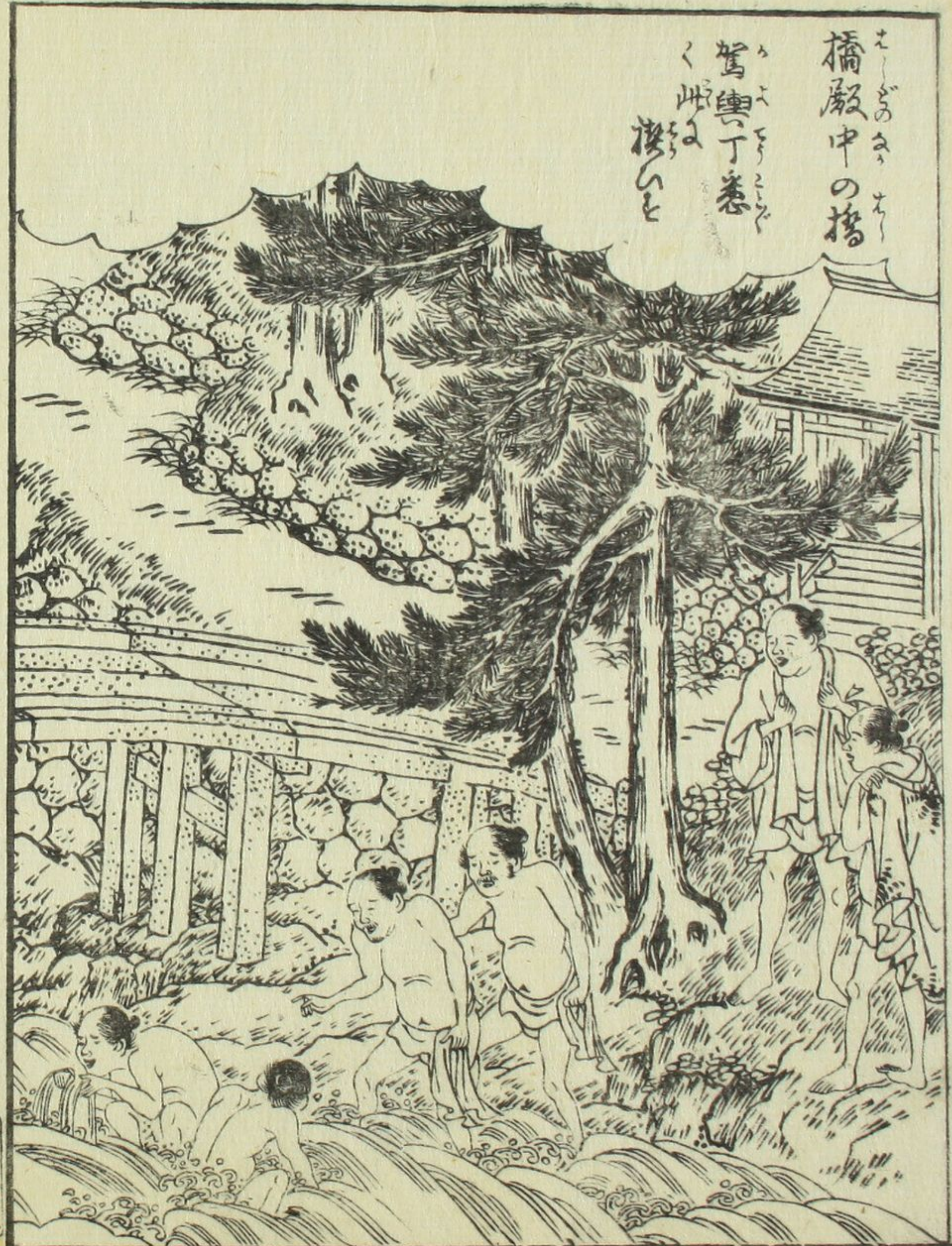
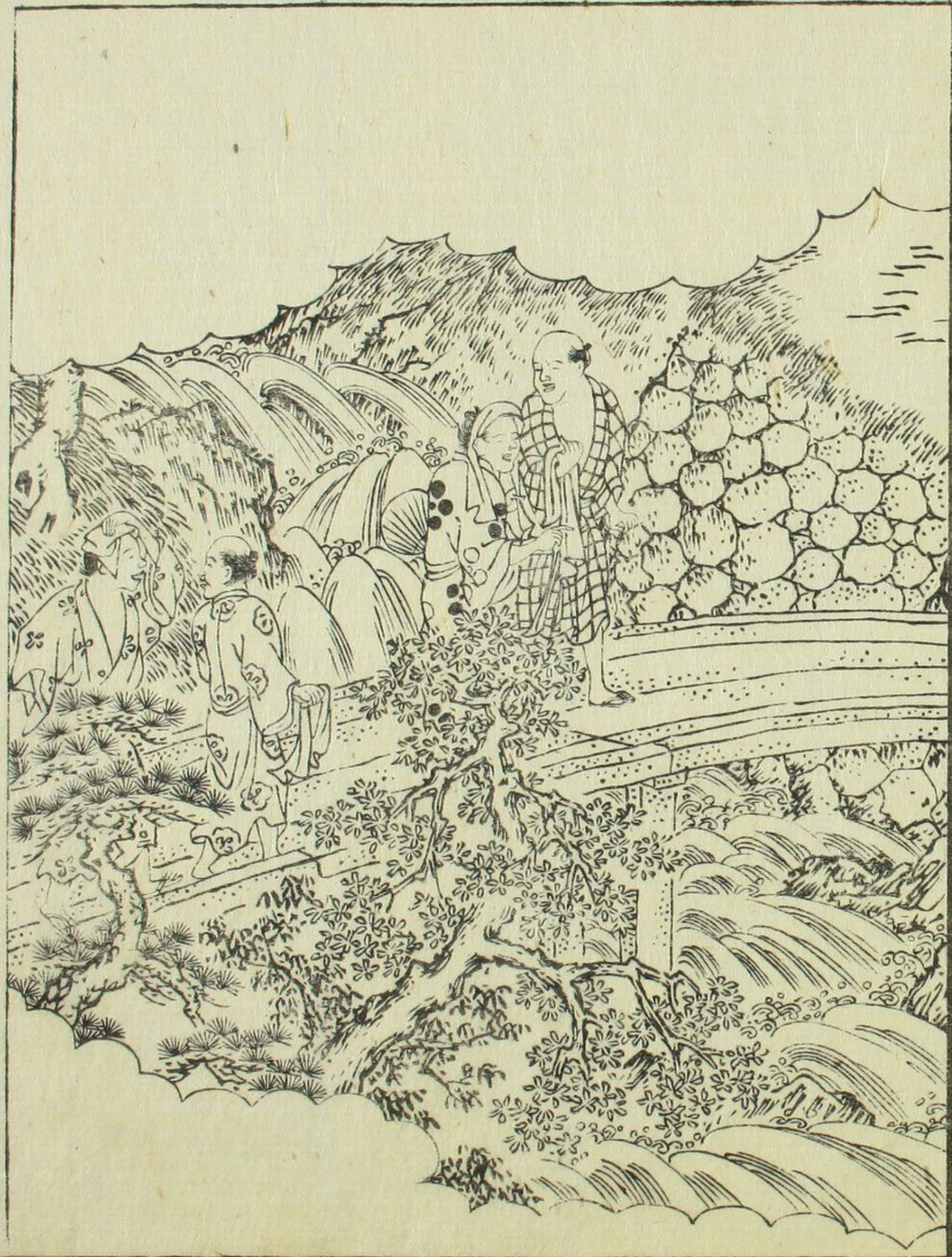


死し老角山門  
 ありしとて大なる  
 嵐となり移安  
 ありし山門の  
 教と喰やうり  
 一ういそと  
 んがふよ宝倉  
 を立てて神  
 号て瀧の室  
 倉とて











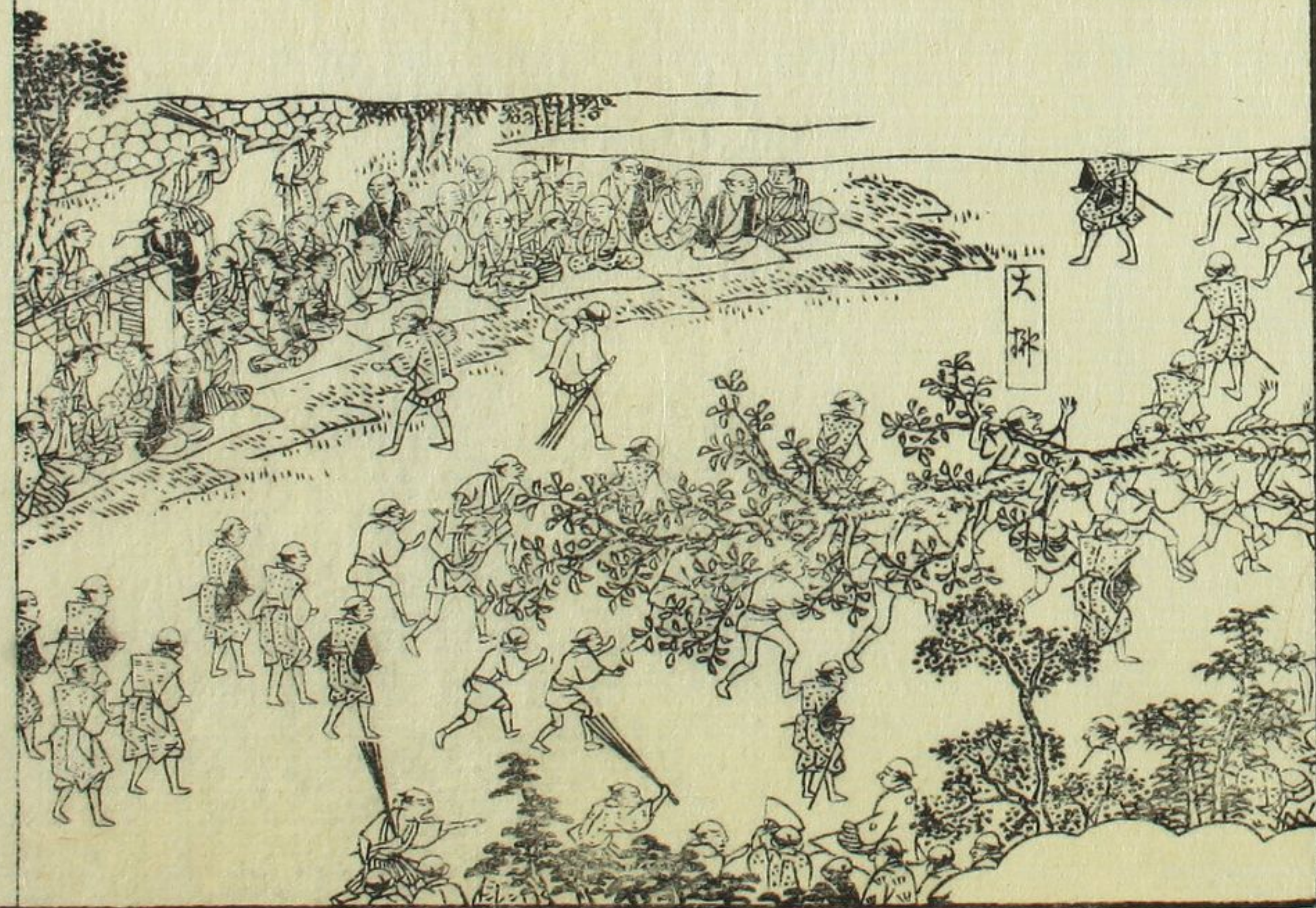
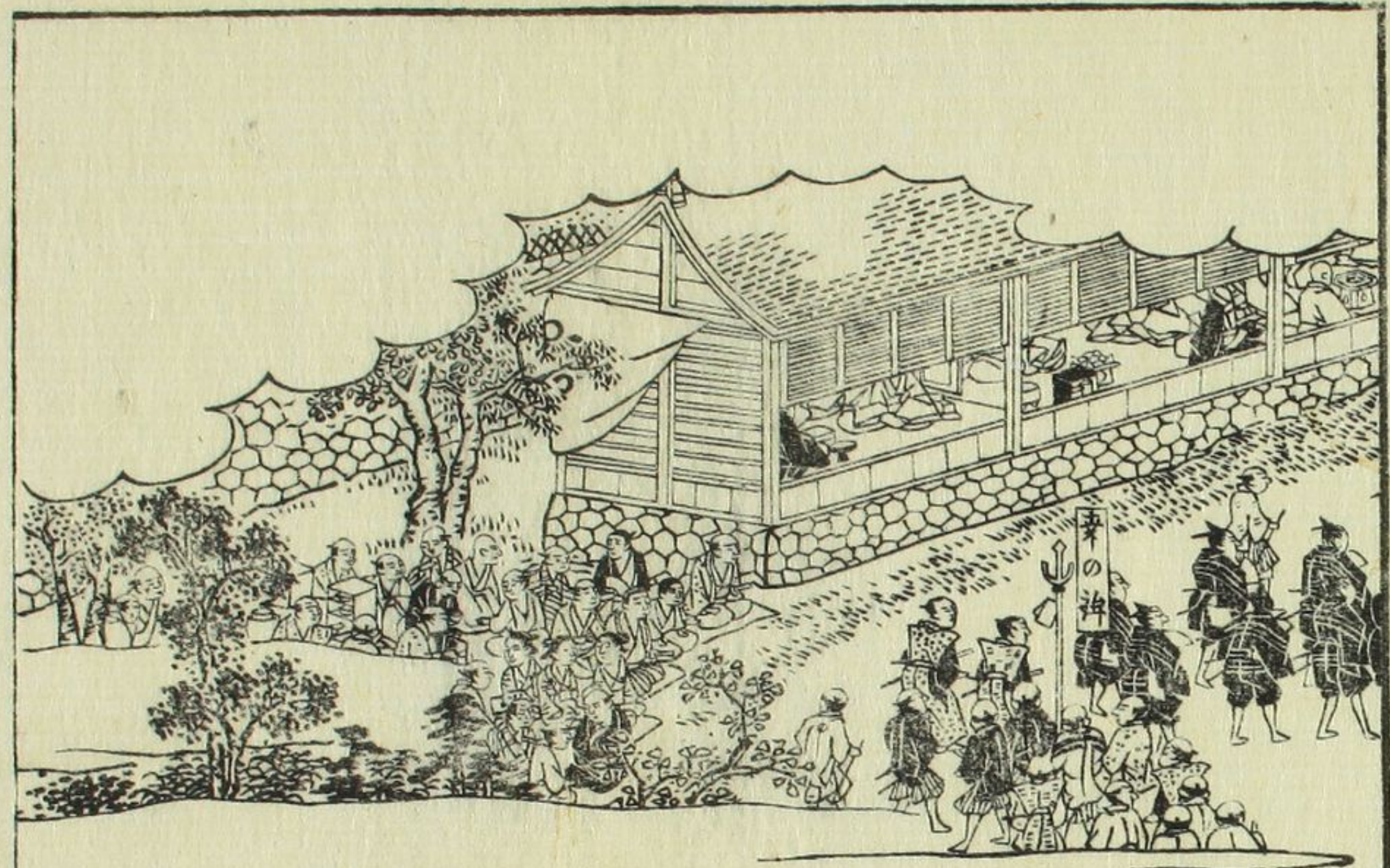


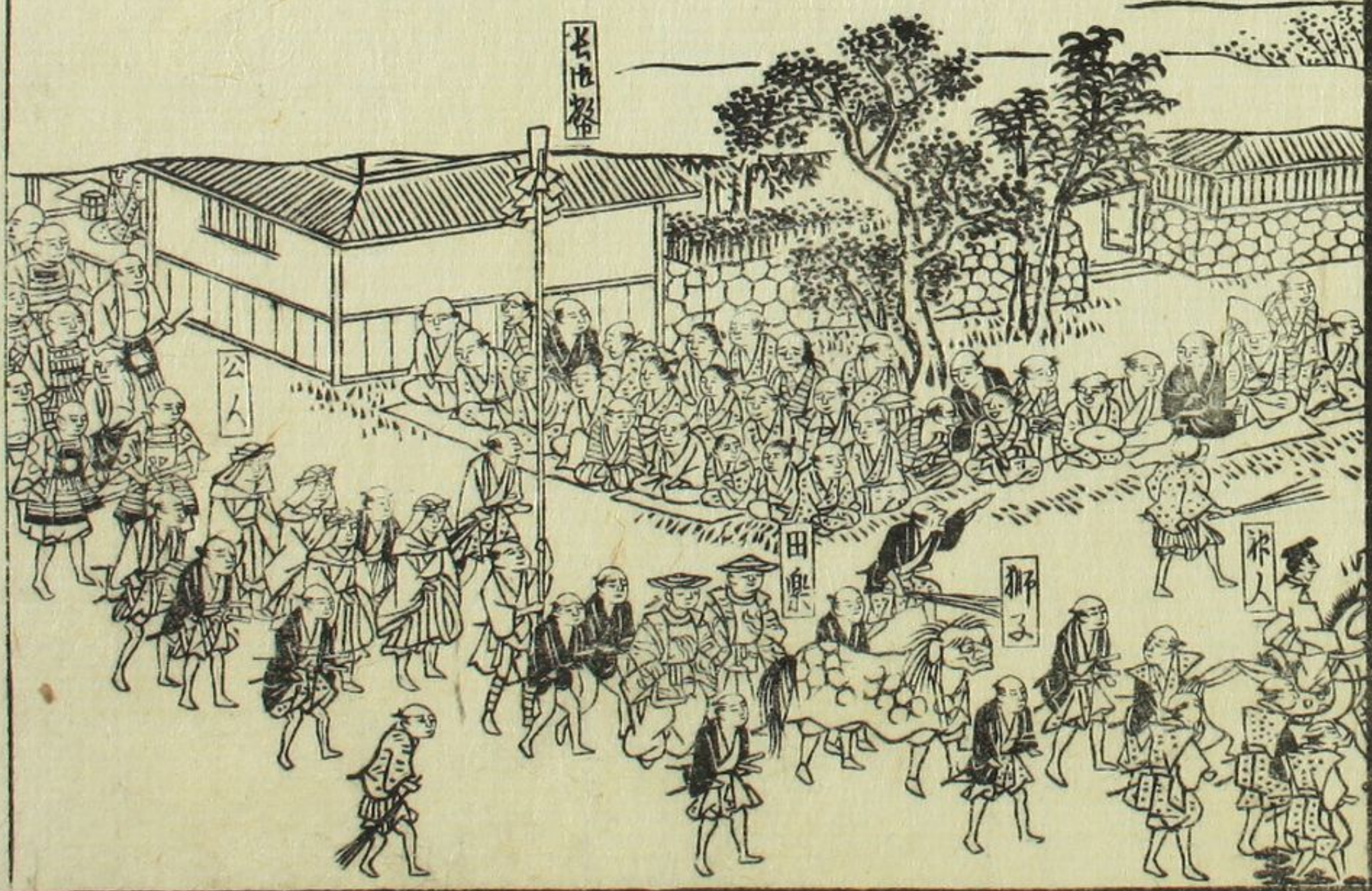
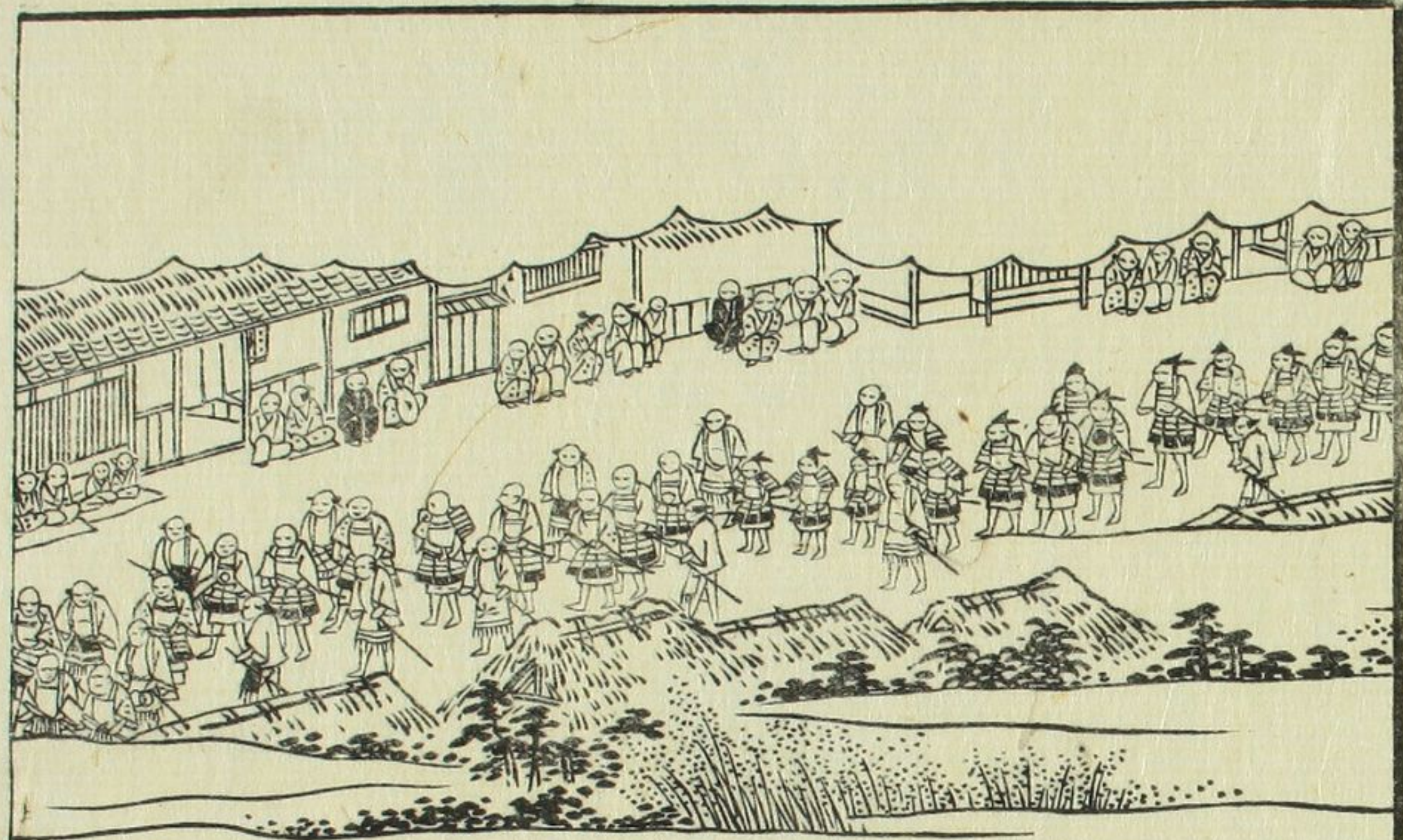




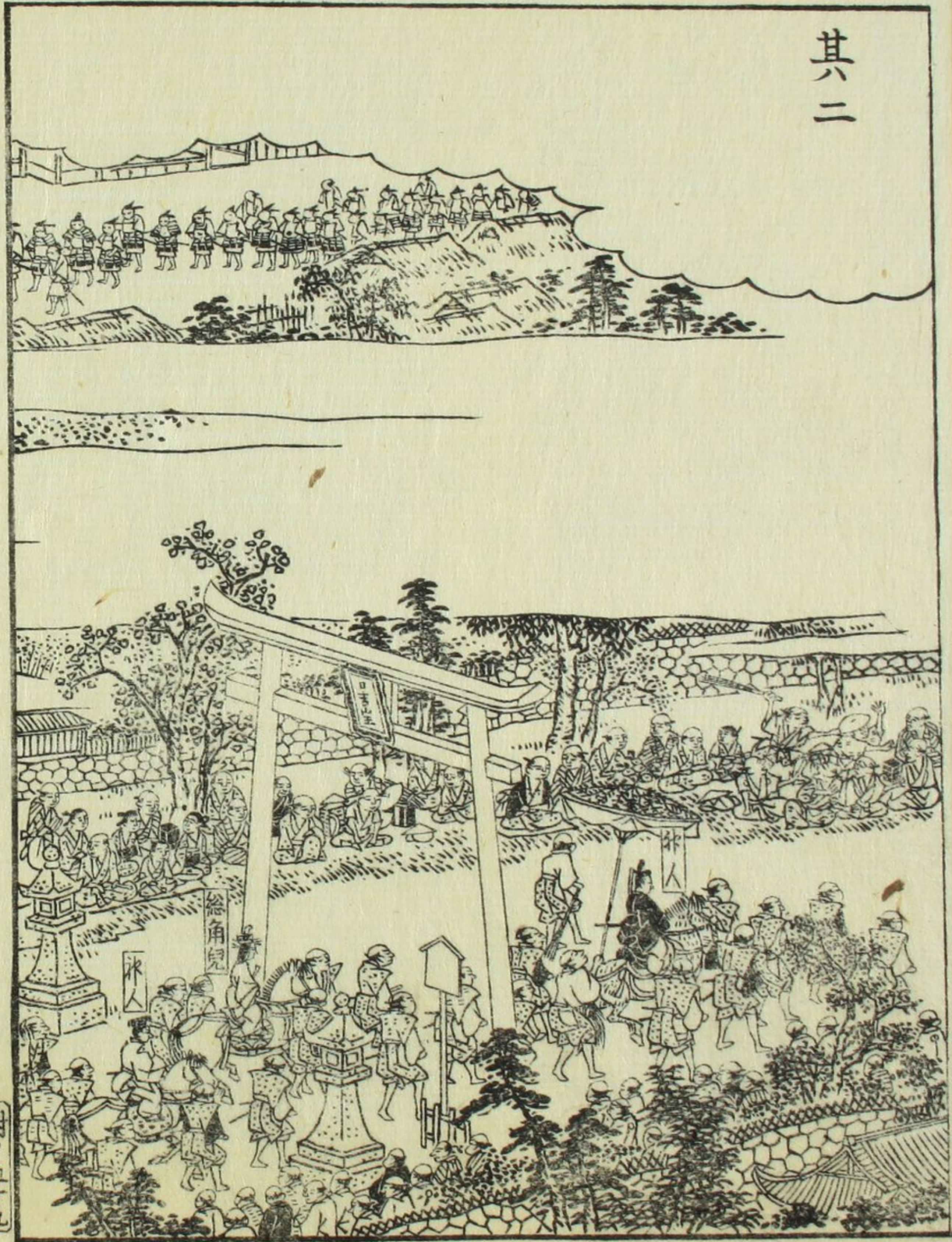
旧社の神輿  
 よこや押し  
 申の祭辰神輿宿の  
 祭に獅子舞田楽  
 一社毎に勤む  
 二の宮の祭  
 終るをお國  
 こして旧ツの  
 神輿一町  
 落一ト  
 てより始り  
 に其先と  
 祭入す  
 まことん  
 被竹の  
 おく







其二



附ノ五十九



あつまる生源寺の種をばくす三度午の祓奉の旭法は日下致会園の中  
小坂中役者をして拂の宮七度申の役ありて是後神のこれより拂渡神  
何の其況左方得長者此れ大御幣。宮仕三人襖衣を着る。古刀を佩三人  
日吉神樂礼舞政所貞亨六年庚申四月を素襖又十人二列を。日宮神人袴を履夜よて

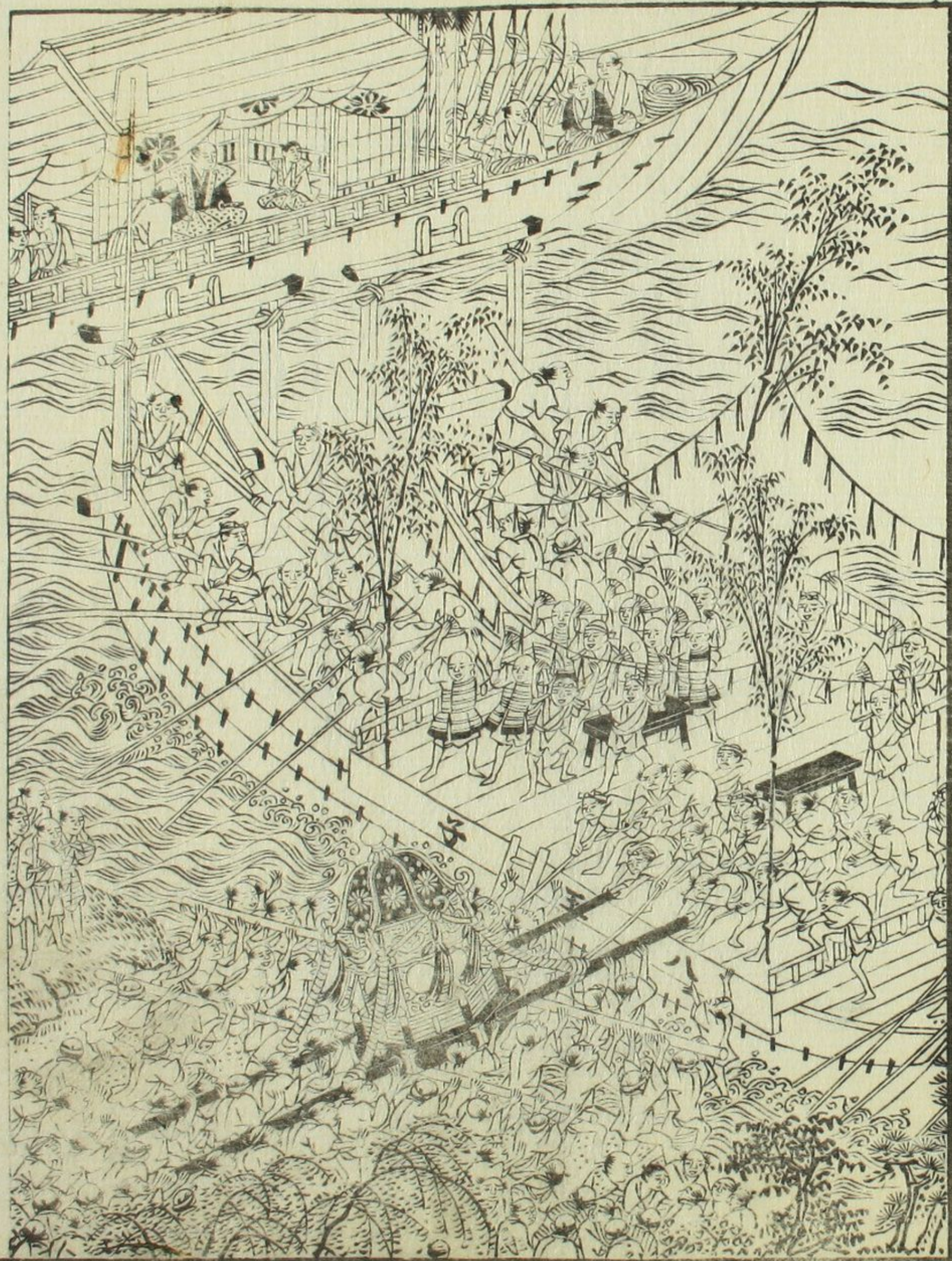
踏次引引致会樹のふら。幸の神。大拂。衣冠神人。系馬。ここのけのふらを  
りておまけりこれ指不分明神。総角の思奉一人赤衣を束束はく馬よあつるこれ松平  
のふらよりたあしはとむ。布衣の神人。系馬。一人日宮の神人。かくて拂作りるより二のを并よ入馬  
場をのり早尾社の系馬。大宮みどり。拂を社の東の方へ掃をく  
此間幸厳重み執りひく。棒つと又付まごふ者もより竹をばて人の不  
礼を制して呵嘖とらふ。其くこれ却て服見の二真もあつり。三  
院の核のふらにて獅子回樂を以て終る。本磨と是の公人。三院別  
當。六別當。十六谷の公人。三院本谷の公人。又人の身姿。法師。  
上坂本の役者。濱方の役者等。あつり。渡り衣を着る公人三十  
人。余糧を看する公人百十人。余上坂本の役者八十人。余濱方の役の者  
六十人。余都合三百人。より。次み七社の駕輿。丁七百人。加勢もも。五人  
斗致会園の後。續てのり。先大宮神輿と始り。て春日の園の若後  
へ昇り。副脈をくむ。此府比叡の役。大拂の西。列を。て刀劍とぬ

きてこれを發誓。一。教て人の通路と許す。此間社家大座より。春日  
園の辺。み。笏拍を。て。祓致会奉。と。是を。春日。と。右。伶人を  
向樂と奏せし。と。先より申。刻。唐。祓。奉。の。次。先。祓。馬。七  
正。換。合。の。を。并。より。二。のを。并。を。經。て。七。本。柳。の。邊。へ。ひ。き。く。取。の。と。る。次。七。社  
の。神。神。七。基。換。合。の。を。并。より。大。を。并。の。傍。に。し。神。神。を。走。る。但。大。宮。の  
御。神。より。と。猿。回。の。面。を。く。く。七。社。の。を。被。馬。場。を。り。て。これ。又。神。輿。の  
取。の。の。人。社。来。も。み。り。ら。あ。り。て。石。の。社。家。二人。衣。冠。騎。馬。を。持。白。丁。三  
人。め。供。奉。一。馬。場。を。り。一人。大。を。并。の。邊。に。ま。る。一人。七。本。柳。より  
役。船。の。系。り。唐。袴。み。り。て。大。宮。の。神。輿。取。の。の。是。神。供。祝。云。の。と。り。也  
次。大。宮。仕。一人。幣。と。白。丁。二人。は。ち。馬。場。を。り。七。本。柳。より。役。船。の。系  
て。唐。袴。み。り。て。是。神。馬。還。神。祝。云。の。た。り。なり。神。輿。渡。神。の。系。に。挂  
の。枝。一。把。で。三。院。其。各。其。社。の。官。仕。其。院。の。核。後。へ。持。来。り。次。七。社。官。仕  
神。劍。を。り。馬。場。を。り。次。を。神。持。七。人。拍。各。神。輿。の。取。の。系。の。と。り。り  
七。社。の。神。輿。退。り。馬。場。を。り。於。り。其。各。各。換。合。を。并。の。下。系。大。拂。の。東。門。所  
に。押。ひ。く。指。磨。と。る。是。神。輿。の。列。の。遲。速。を。き。く。一。與。に。廿。人。が。系。並。り  
七。本。柳。へ。より。て。神。取。の。せ。を。る。の。これ。又。と。り。や。る。の。是。と。り。て。既。神。輿。の  
脈。字。が。取。の。の。網。と。り。け。く。取。中。より。も。引。と。る。篤。人。數。十。人。取。と。漕。き



七奉柳海岸よ  
 七社の神輿舟  
 沖又漕舟修  
 白





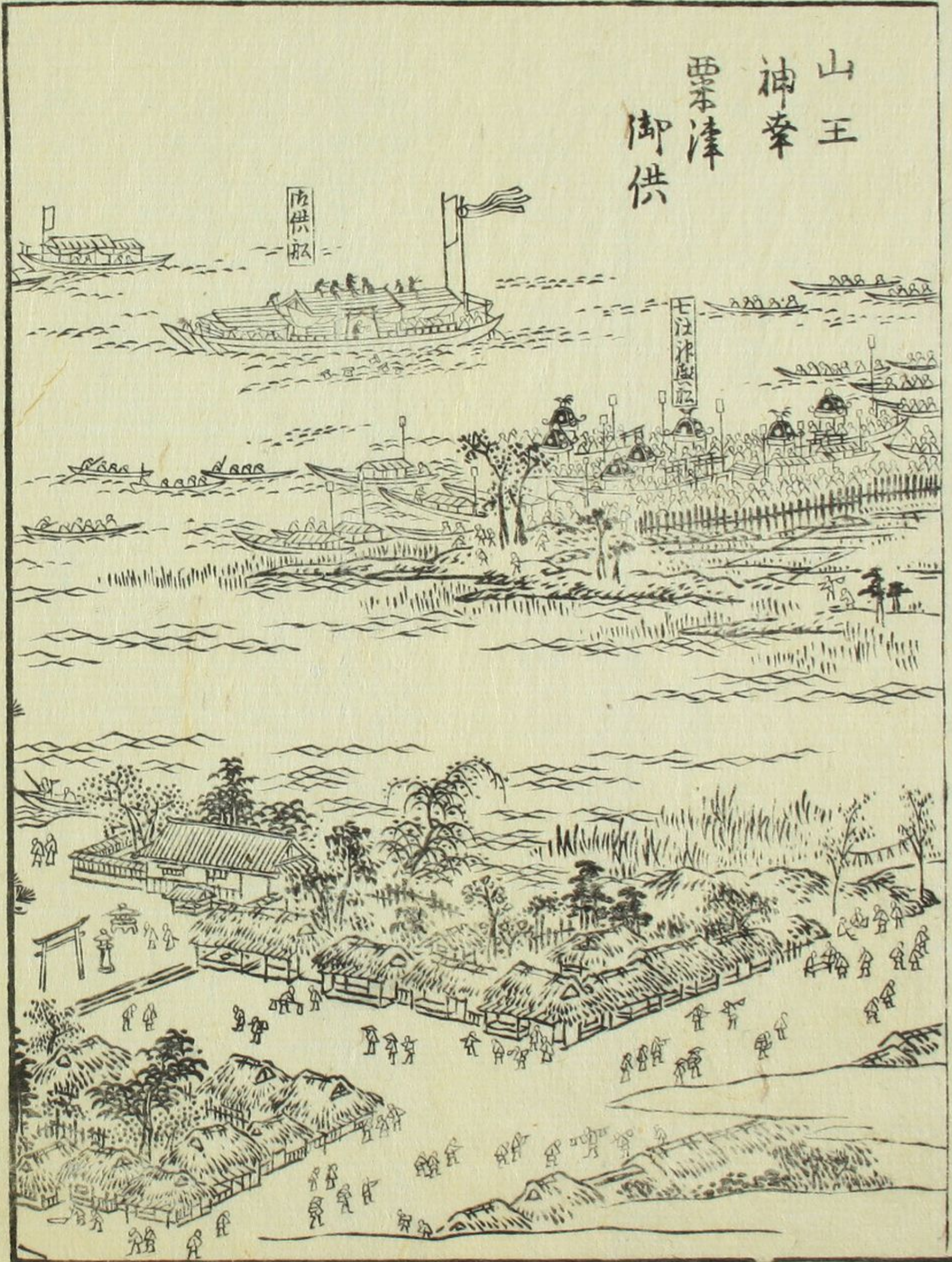


唐寄明神

千狐松



山王  
神幸  
栗津  
御供













よき系之西一比良のき根ん中れ

ふみとこは小松が岩のまの風よりりてもたのまふあひは

巻注

○揚梅瀧 小松の西の南乃て西の方此らあり

○鑑山石 五三坂かどとたかぶくー小松と白鷺明神の海辺より此間岩礫凝りり

屏風をまきさかたか下を継来をその間六町斗此邊とて奇石多し

白鷺明神 比良の麓お下あり比良明神も男く 人皇に十八代聖武天皇詔ありて

英令をりりたるは老翁と化現して良布僧正ありし神と傳へり。淡海

志曰永祿五年の早は九月十九日白鷺大明神社の前の海を町斗より石のを并

りりし出月廿二日をも并拜殿の邊まで湖ありて再び見たり。○廿十八

許の石佛あり此内二十作の坂あり。○明神より南に志賀郡小の傳那あり

お下里 白鷺と延命寺。○白鷺別當福壽院あり

大溝 城郭あり天正年中織田七玄清信澄居城とて其後分郡た京亮との

城を揚りりて代々居せらりり

伊勢参宮名所圖會卷附録終

附八十一

寛政九年丁巳五月



京都書林

菱屋孫兵衛

吉文字屋市左衛門

柏原屋與左衛門

柏原屋嘉兵衛

塩屋 平助

勝尾屋六兵衛

塩屋 忠兵衛

大坂書林

